
Lebewohl

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lebewohl

【Nコード】

N2335S

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

ロシア作戦と呼ばれた事件。その後にあつたちょっとした日常の物語。

「僕、貴方がウォールナットを名乗る理由が少し分かった気がしますよ」

洋一がそう言ったのは彼らが重傷のレイアを連れて戻った五月の事だった。

病院前の公園は広く緑に溢れている。患者や見舞いの者達が行き交う中でエーリと洋一という組み合わせは特に目立ったところがない。喫煙スペースでもあるベンチに腰を下ろしているエーリに、ロシアで起こった事件の一部始終を見てきた少年はまるで旅行から帰ってきた時のような気軽さで笑いながらエーリに胡桃を渡す。

北欧混じりの東洋人である洋一は実年齢よりも随分と若いように見える。既に二十歳を超える年齢だったがどう見積もってもまだ十代半ばくらいにしか見えない。幼い外見に騙されがちになるが、彼は見かけ以上に様々な経験を重ねてきている。

そして、誰よりもまともな精神を持っていながら、誰よりも狂っている。そういう少年だった。

「お土産です。これは実の方ですが」

ウォールナットはクルミ材を意味する。

元々はエーリがエドと駆け落ちをした後に開いた修復屋の名前だ。本名を名乗らず敢えてその名前と呼ばせ続けたエーリは、別に妻との思い出にすがっているわけではない。思い出したところで辛いだけの名前だ。思い出しても彼女が戻ってくる訳ではないので無意味だと言うことも知っている。それでもその名を名乗り続けた。

名乗る理由があったのだ。

それは恐らく親友のため。

親友が残した「娘」を守るための名前。

含んだメッセージに気付くか否かの浅い賭け。

「結局お前が助けたんだな」

胡桃を受け取りエーリは彼を見る。

ロシアでは沢山の「仲間」が死んだ。少年はそれを初めから予測しながらも気付かないふりをして一団に加わっていた。リーダーであるレイアは死ぬ覚悟があったのだろう。むしろ死にたかったのかもしれない。だが少年はそれを許しはしなかった。

睨んでいいのか微笑んでいいのか、正直エーリには解らない。

洋一はつられて笑ってしまいそうなほど柔らかい笑みを浮かべてみせた。

「僕、本当はどっちでも良かったんですよ。だからちょっと賭けてみたんです」

何をとは問わなかった。

それは愚かしい質問だ。

エーリも恐らく今同じ事をしている。

「……間違いか、最善か」

不意に漏らすと洋一は少し不思議そうに首を傾げた。

「前から聞こうと思っていたんですけど、それって何なんですか？

レイアさんも貴方も良く使いますよね」

「ああ、ラリーの……先代の社長の口癖だよ」

「レイアさんのお父さんの？」

「いや、ラリー・シェインの口癖だ」

一瞬少年が瞬く。

声が僅か低くなった。

「……そんなこと、僕に言ってもいいんですか？」

「お前なら気付いていただろう、東洋人」

「先代にはお会いしたこと無いから、確証は持てませんでしたけど」レイアは本当は先代の娘ではない。彼女自身気付いているか知らないが、この組織の人間は知らない。ただ、エーリは親友が犯した「罪」を知っている。結局、エーリ以外の誰にも語らず墓場まで持っていくってしまったが。

少年の声が元のトーンに戻る。

「貴方は僕のこと一度もバタフライとは呼びませんでしたね」

「お前には似合わないだろう？」

「胡桃は貴方の為にあるような名前でした」

「……でした？」

「もう、必要ないでしょう」

エーリはちらりと笑う。

「俺に？ それともお嬢に？」

「あなたに、です」

彼は優しい笑みを浮かべる。

「レイアさんは必要な事すら分かっていなかった。僕は先代に会ったことはないけれど、貴方やガイルさんから受ける印象からどうもレイアさんは先代の気持ちををはき違えているようにしか思えなかった」

「………」

「貴方は答えを待っていたんだ。傍観者に徹することで彼女の答えを待っていた。結局、貴方の求めていた答えは戻ってきませんでしたね。あの子は必要なものを気付かずに手放してしまった。だからあの子には手にするだけに値しない」

「そんなたいそうなもんでもねえよ」

エーリは煙草をくわえて火を付ける。

飲み込むと甘いメンソールの味がした。

別に彼女を試したつもりはない。

賭をしたのは事実だった。親友の「娘」である彼女はエーリにとってそれだけでしかない。好いた感情などなく、むしろその甘さや浅はかさに辟易としていた。

だからもしも彼女が自分自身で「父親」の残した真意に気づけたなら、好きになれるだろうと思っていた。それが実現不可能だとはエーリは思っていなかった。むしろ甘い期待をかけていたとも言える。

ただ、もう無理なのだと知った。

彼女の側に残ったのはガイルではなくロハであったから。

もう、無理なのだと知った。

そう彼女が答えを出してしまったから。

「……お前の探している答えは出たのか？」

「いいえ」

洋一は少し困ったように笑う。

狼のような灰色の瞳がエーリを見つめる。

「貴方の答えが一番僕にとっての正解に近かったんだろうと思います。出来ることなら、僕も貴方も子供だった頃にお会いしたかった」

エーリは手の中で転がる胡桃を見る。

堅い胡桃を握ると逆に手の方が痛くなる。

クルミ材も同じように固い。そのくせ、加工がしやすく長持ちもする不思議な材質。それを名乗ったのは自分が優れていると言いたかった訳ではない。

むしろその逆だ。

未熟なのだ。

自分も彼女も。

だから彼女が自分との賭けに勝ったなら、最後まで見届けようと思っただのだ。でも、もうそれは無意味だ。

結局見ている物が違いすぎたのだ。

「……お前、どうする？」

「もう少し待っています。ロハさん一人じゃ少し心配ですから」

「そうか」

エーリは立ち上がり煙草を灰皿の中に捨てた。

もしも残ったのがガイルだったら、彼は待たずにエーリと帰っただろう。もつとも、残ったのがガイルだったなら、エーリがここで待っていたかもしれない。

洋一の前にエーリは拳を突き出した。

手の中には先刻洋一から受け取った胡桃が入っている。

「お前にやる」

「僕がさっきあげた物ですよ」

からかうように言ったが、洋一は嬉しそうにそれを受け取った。

「でも、ありがたくもらっておきます」

自分とよく似た少年。

多分誰よりも互いに理解し合っている。

鏡なのだ。

輪郭がまるで違うけれど、恐らく同じ物を求めている。そして、それは自分自身で見つけ出さないといけないことも知っている。

エーリは軽く微笑む。

「……エーリッヒ・フォン・マンシュタイン」

「え？」

「愛称はエーリだ」

洋一は少し呆けたような顔つきになった。

今までで一番子供のような表情だった。

やがてそれが極上の笑みになる。

「エーリさん」

「ああ」

「エーリさん、これ、今までもらった物のなかで一番嬉しい」

「そりゃよかった」

「……これからどうするんですか？」

「ん、まあ、煙草でも買ってくる」

そうですか、と洋一は頷いた。

微笑んだ彼は何もかも理解しているように見えた。

踵を返すと後ろから洋一が声をかけてきた。

「それじゃあ、Lebewohl………また、後で」

「ああ」

エーリは片手を軽く上げて振ると振り向きもせずに歩き出した。

その場所に彼が戻ることは二度と無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2335s/>

Lebewohl

2011年4月5日07時40分発行